

# 主要都市の人口およびその増加率からみた トルコ・イランの都市システム

北田 晃 司\*

## I 序論

都市システムは常に変化を遂げるものである。特に国家的都市システムはこれまで日常的都市システムや地域的都市システムに比べて資料上の制約を受けることが多かったが、その変遷過程の検討や国際比較を通して、より時間的および空間的に広い視点から研究を行うことの重要性が、近年、わが国を含めた多くの都市地理学者<sup>1)</sup>によって指摘されている。

このような状況を背景に、欧米諸国においては、単に一国の都市システムの検討にとどまらず、各国の固有の状況を重視しながらも、より広い地域スケールで見た場合、例えばヨーロッパなどの同一地域内にある国家的都市システムにはほぼ共通した特徴が存在することを指摘し、その上でこれらの都市システムに関する、特に変遷過程に重点をおいたモデルを提示した研究が登場している。

例えば Berg and Meer (1988) はオランダを例に、近年のヨーロッパ諸国の都市システムにおいては、近郊化と脱工業化が、都市システムに変化を与える最も重要な要因であることを指摘した。また北田 (2000) も、これまで他のヨーロッパ諸国に比べて研究例の少なかったイタリアやスペインなどの南ヨーロッパ諸国の都市システムにおいても同様の傾向が見られることを指摘した。

一方、ヨーロッパのみならず、この数十年間に

めざましい経済成長を遂げた東アジア諸国についても、各国の都市システムの変遷過程に共通点が見られることが指摘されている。例えば日本 (阿部, 1991)、韓国 (北田, 1997) のいずれの都市システムについても、高度経済成長とともに首都を頂点とする都市間階層構造が強化されてきた。

たしかにこのような視点に立脚した都市システム研究は、資料の制約などもあって、まだヨーロッパ、アングロアメリカ、東アジアなどのごく一部の地域について行われているにすぎない。しかし今後の都市システム研究においては、前述のように都市システムの変遷過程や都市システムの国際比較に関する研究がより重要な地位を占めることはもはや言を待たないであろう。そのためには単に一国の都市システムのみ注目するのではなく、同時に歴史的、文化的に類似した状況にある周辺の国々の都市システムにも留意し、その上でそれらの都市システムが世界の中でいかなる位置付けにあるのか検討することが最も重要な作業であると言っても過言ではない。

本研究においては、いわゆる西アジア・北アフリカ<sup>2)</sup> 諸国の都市システムを取り上げ、その中でも最も人口の多いグループ<sup>3)</sup> に属するトルコとイランの都市システムに重点をおいて検討する。

## II 西アジア・北アフリカの都市システムに関する先行研究の概観と本研究の視点

都市システムに限らず、地理学において西アジ

\*中京大学非常勤講師

ア・北アフリカ諸国を扱った研究は特に1970年代以降、急増した<sup>1)</sup>。

この第Ⅱ章では、まず分析を開始する前提として、西アジア・北アフリカの都市システムおよび都市システムの背後にある社会的状況などを扱った先行研究の中から、主に日本人研究者によって行われたものについて概観する。

まず西アジア・北アフリカ諸国の都市システムそのものを扱ったものとしては内藤(1985, 1988), 佐藤(1988), 阿部(2001)などがある。内藤(1985)はシリアの都市システムの特色および概要について、シリアという国家が成立する以前の状況を含めて歴史的に検討した。同じく内藤(1988)は、シリアのようにイギリスやフランスなどの大国の主導によって国境が形成され、かつ第二次世界大戦後の1946年という比較的新しい時期に独立した国家においては、いわゆる国家権力が都市システムの形成に極めて大きな役割を果たしてきたことを指摘した。佐藤(1988)は、エジプトの都市システムが特に1940年代から1970年代にかけて首都カイロが卓越性を強めてきたことを明らかにした。阿部(2001)は大企業の本社および支所の立地を通して主要な発展途上国の都市システムについて分析を行っているが、このうち西アジア・北アフリカ諸国についてはサウジアラビア、エジプト、モロッコの3国を取り上げている。

また、各国における人口移動などに関するデータの分析を通して、西アジア・北アフリカ諸国の都市システムの動向を左右する重要な諸要因が存在することを示唆した研究も少なくない。

例えば加納(1995)は西アジア・北アフリカ諸国の主要都市の人口増加率およびその背景について概観した。またこれらの国々の中からさらにイランについて分析を進め、1979年のイスラム革命以降、イランの都市化が政府の地方分散化政策や政情の不安定などの要因によって大きな影響を受

けていることを指摘した。鈴木(1997)は主要都市の配置や地方間の人口移動を通して、イランの国土空間には首都テヘランを頂点とし、その下にいくつかの重要な地方都市が続くという階層構造が存在することを示唆した。ケレシュ・加納(1990)はトルコの都市化や人口移動について検討し、1976年以降、イスタンブールなどの大都市の人口増加率が高くなっていることを指摘した。

さらに主要都市を対象とした綿密なフィールドワークを行い、各国の都市が抱える様々な問題について明らかにしたのものには、アンカラなどのトルコの都市を扱った寺坂(1994)、同じくトルコのアンタリヤを扱った水内(1996)、イランのテヘランを扱った加納(1980)などがある。

以上に紹介した諸研究は、豊富な統計やフィールドワークに基づいて、これまでわが国において必ずしも十分な研究蓄積があるとは言えない西アジア・北アフリカ諸国の都市システム、あるいは人口移動とその社会的背景<sup>5)</sup>について多くの新しい情報をもたらした点では大いに評価されよう。

しかしその一方で、これらの先行研究は、特定の一國のみを取り上げた研究が圧倒的多数を占めていることも否定できない。今後は第Ⅰ章でも述べたように、同じ西アジア、北アフリカにある複数の国の都市システムの国際比較を通して、検討対象の都市システムを空間的、時間的により広い視点から検討する作業が不可欠であると言える。

さらに西アジア・北アフリカ諸国に限らず、同一地域にある都市システムの多くに共通する特徴<sup>6)</sup>を見出だした上で何らかのモデル化を行うためには、対象地域の都市システムが世界の中ではいかなる位置付けにあるのか、特に国境を越えた資本や労働力の移動、いわゆる「世界化」(globalization)のように、近年、地球規模で進展している現象が各国の都市システムにいかなる影響を与えているのか検討することが重要と考え

られる。

ただし西アジア・北アフリカ諸国については、第1章で指摘したヨーロッパ諸国や東アジア諸国のように、ただ各国の都市システムが時間的な差こそあれ、いずれはその大半が同じ方向に向かうという前提のもとに分析を行うことには問題があると考えられる。たしかに西アジア・北アフリカという地域はイスラム教や乾燥気候といった地域内の多くの国々に共通する要素も存在するものの、同時に政治的、経済的、あるいは文化的には世界でも最も多様性に富み<sup>7)</sup>、かつ国際紛争や内戦の多い不安定な地域でもある。ゆえに各国の都市システムを検討する上でも、各国の多様性については他の地域以上に十分に注意する必要がある。

本研究においては以上の点に留意した上で、前述のように西アジア・北アフリカ諸国の都市システムの近年の動向について、トルコとイランを例に検討する。資料としては国連人口年鑑に掲載された両国の主要都市の人口の値を用いる。

また検討対象年度は1970年代後半および1990年代後半とする。この1970年代後半から1990年代後半にかけては、1979年のイラン革命、1980～1988年のイラン・イラク戦争、1991年の湾岸戦争に象徴されるように、多くの西アジア・北アフリカ諸国が政治、経済、社会などの様々な側面において大きな変動を経験した時期に相当する。なお、1990年代後半は現段階において、国連人口年鑑に掲載された最新の統計数値が得られる時期でもある。

表1は検討対象年度にほぼ相当する1976年および1996年について、国連人口年鑑に数値が掲載された西アジア・北アフリカの主要国の都市人口率を示したものである。これによると、トルコ・イランの両国は、同期間における都市人口率<sup>8)</sup>の増加がエジプトなどの周辺の国々に比べて大きいこ

表1 西アジア・北アフリカの主要国の人口、都市人口、都市人口率(1976年および1996年)

		1976年	1996年
トルコ	総人口(万人)	4108.5	6152.8
	都市人口(万人)	1791.7	3932.0
	都市人口率(%)	43.6	63.9
イラン	総人口(万人)	3366.2	6005.5
	都市人口(万人)	1579.7	3681.8
	都市人口率(%)	46.9	61.3
シリア	総人口(万人)	759.6	1384.4
	都市人口(万人)	354.3	711.2
	都市人口率(%)	46.6	51.4
イスラエル	総人口(万人)	353.3	568.9
	都市人口(万人)	301.0	509.9
	都市人口率(%)	85.2	89.6
エジプト	総人口(万人)	3665.6	5931.3
	都市人口(万人)	1609.8	2528.6
	都市人口率(%)	43.9	42.6
モロッコ	総人口(万人)	1782.6	2684.8
	都市人口(万人)	695.7	1410.0
	都市人口率(%)	39.0	52.5

各国の「都市」の定義については、注8)を参照。  
シリアのみ1996年は1994年の値である。  
国連人口年間による。

とから、都市システムについても少なからぬ変化が生じたものと考えられる<sup>9)</sup>。

さらにトルコとイランを検討対象に選んだ理由としては、前述のようにいずれも西アジア・北アフリカ諸国の中では人口規模が最も大きなグループに属することに加えて、主要都市の多くが帝国の首都あるいは交通の要衝などとして盛えた古い歴史を持ち、他の西アジア・北アフリカの諸国の主要都市と歴史的・文化的背景が類似していることも挙げられる。

しかしその一方では1970年代後半以降、トルコは主にこれまでのドイツなどのヨーロッパ諸国への出稼ぎに加え、観光産業の発達などを通して欧米諸国との経済的関係が一貫して強化されてきたのに対し、イランは1979年のイラン革命を契機に欧米諸国、特にアメリカとの関係が冷却化した。

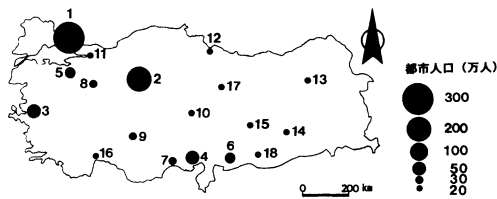


図1 トルコの主要都市の分布（1979年）  
各都市の番号は、表2に示した1979年の人口順位（上位18位まで）を示す。

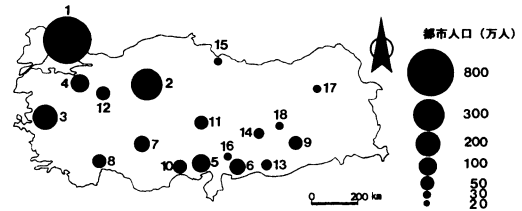


図2 トルコの主要都市の分布（1997年）  
各都市の番号は、表2に示した1997年の人口順位（上位18位まで）を示す。

このことから世界化の影響については両国は極めて対照的な状況にあると言え、前述の西アジア・北アフリカの多様性に留意する上でも両国を取り上げることは非常に有意義であると考えられる。

### Ⅲ トルコの都市システムの変遷（1979～1997年）

図1と図2は、トルコの1979年および1997年における人口<sup>10)</sup>上位18都市を示したものである。また各都市の人口の実数値を表2に示した。

今日のトルコの主要都市は、前述のように帝国の首都、あるいは交通の要衝として盛えた古い歴史を持つものが多い。前者の代表としてはビザンチン帝国およびオスマン＝トルコ帝国の首都であ

ったイスタンブール、オスマン帝国の初期の首都であったブルサ、セルジューク＝トルコ帝国の首都であったコンヤ、後者の代表としてはガジアンテプ、カイセリ、ウルファなどがある。またアンカラは1923年に新たに首都に定められた、トルコの中では比較的歴史の新しい都市である。

まず1979年の状況を見ると、イスタンブールとアンカラという2大都市の人口が突出しており、イズミルなどの3位以下の都市との間には大きな格差が存在していたことがわかる。また全体としてはアンカラを除いた大都市の多くが比較的気候の温暖な国土の西半分の海岸沿いに位置しているのに対して、東部<sup>11)</sup>にはめぼしい都市はほとんど存在しない。

次に1997年には図2および表2に示すように、1979年に比べてほぼすべての都市で人口が増加しているが、その増加率については明確な地域差が見られる。

図3は1997年における上位18都市について、1979年から1997年の間の人口増加率を年平均増加率に換算して示したものである。これを見ると年平均増加率が5%を越える都市は、ウルファ<sup>12)</sup>とディヤルバクルを除いて、イスタンブール、イズミル、ブルサ、アンタリヤと、すべて西部の海岸沿いに位置する大都市である。これとは対照的にアンカラ<sup>13)</sup>をはじめとする内陸都市の人口増加率はかなり低く、特にアンカラは人口順位では引き続き第2位の都市ではあるが、イスタンブー

表2 トルコの主要都市の人口（単位：万人）

順位	1976	順位	1997
①	イスタンブール 282.3	①	イスタンブール 826.0
②	アンカラ 210.6	②	アンカラ 298.4
③	イズミル 73.1	③	イズミル 208.2
④	アダナ 58.6	④	ブルサ 106.7
⑤	ブルサ 40.4	⑤	アダナ 104.2
⑥	ガジアンテプ 36.3	⑥	ガジアンテプ 71.3
⑦	メルシン 33.8	⑦	コンヤ 62.3
⑧	エスキシェヒル 29.5	⑧	アンタリヤ 51.2
⑨	コンヤ 28.4	⑨	ディヤルバクル 51.2
⑩	カイセリ 24.6	⑩	メルシン 50.1
⑪	イズミット 20.4	⑪	カイセリ 49.8
⑫	サムスン 19.7	⑫	エスキシェヒル 45.5
⑬	エルズルム 18.7	⑬	ウルファ 41.1
⑭	ディヤルバクル 18.5	⑭	マラティア 40.0
⑮	マラティア 17.5	⑮	サムスン 33.8
⑯	アンタリヤ 16.4	⑯	カフラマンマラシュ 30.4
⑰	シワス 16.1	⑰	エルズルム 29.9
⑱	ウルファ 16.1	⑱	エラーズ 25.1

国連人口年間による。

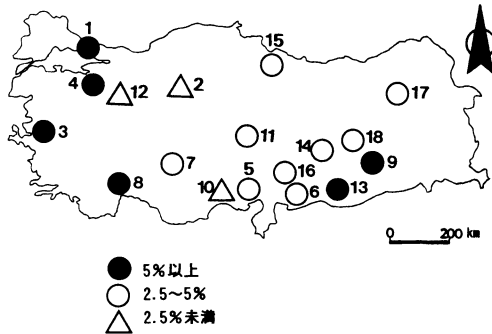


図3 トルコの主要都市の年平均人口増加率  
(1979~1997年)

各都市の番号は、表2に示した1997年の人口順位  
(上位18位まで)を示す。

ルに比べて大きく水を開けられた<sup>14)</sup>。

このような変化が生じた理由としてはまず、ケレシュ・加納(1990)の指摘にあるように、1970年代の前半まで、同国の主に農村部からドイツをはじめとするヨーロッパ諸国に出稼ぎに行っていた人口<sup>15)</sup>の多くが、1973年の石油危機以降のヨーロッパ諸国の経済の悪化を背景としてその目的地を変更し、イスタンブールをはじめとする国内の大都市に流入するようになったことが挙げられよう。またケレシュ・加納(1990)は一度ヨーロッパでの生活を経験してから帰国した場合も、国内の中で社会的雰囲気がよりリベラルな海岸部の都市に移住することが多いことを指摘している。

次に近年のEUの拡大に象徴されるような、ヨーロッパの影響力の強化や国境を越えた経済的関係の進展などの影響を受けて、トルコが出稼ぎ以外の形でもヨーロッパ諸国との結びつきをこれまで以上に強め、そのことが都市システムに少なからぬ影響を与えていることも無視できない。特にトルコは西アジア・北アフリカ諸国の中でも有数の国際観光客数の多い国<sup>16)</sup>であるが、その背景にはヨーロッパから距離的に近いこと以上に、同国はイスラム教徒が大半を占めるものの、トルコ革命を経験したためにイスラム教の戒律の影響が

かなり小さい<sup>17)</sup>ことなどが挙げられよう。そしてこれらの観光客が最も多く集まるのが世界遺産に指定された史跡の多いイスタンブールやイズミル、あるいはリゾートとしての開発が進み、1979年から1997年の間に主要都市の中では最も人口増加率が高かったアンタリヤ(水内, 1996)などの西海岸沿いの大都市であると考えられる。

さらにこれらの都市の中でもイスタンブールについては、多国籍企業の活動などを媒介とする経済の世界化の影響を受け、今後はトルコのみならず、西アジア、あるいは東ヨーロッパの南部をも含めた広い地域における経済拠点としての性格を強める可能性も大きい。

以上に述べたように1970年代後半以降のトルコの都市システムにおいては、西海岸の主要都市、特にイスタンブールの優位性がより強化されてきたことが明らかになった。これは同国が西アジアに位置し、かつイスラム教徒が圧倒的多数を占める国家でありながら、経済的にはヨーロッパ諸国と密接な関係を維持してきたことを反映したものと見えよう。

#### IV イランの都市システムの変遷(1976~1996年)

図4と図5は、イランの1976年および1996年における人口上位18都市を示したものである。また各都市の人口の実数値を表3に示した。イランの主要都市もトルコと同様に、帝国の首都または交通の要衝としての古い歴史を持つものが多い。前者の代表としては1700年代の前半までサファヴィー朝の首都であったイスファハン、同じく1700年代の末に当時のカジャール朝によって作られ、その後現在まで首都としての地位を維持しているテヘランなどがある。後者の代表的な都市としてはハマダーン、タブリーズなどが挙げられる。また国民の大半がイスラム教のシーア派<sup>18)</sup>を信仰するイランでは、同派の聖地であるマシュハドやコ

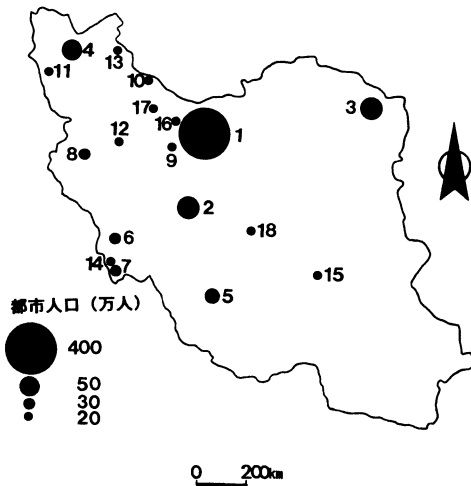


図4 イランの主要都市の分布（1976年）  
各都市の番号は、表3に示した1976年の人口順位（上位18位まで）を示す。

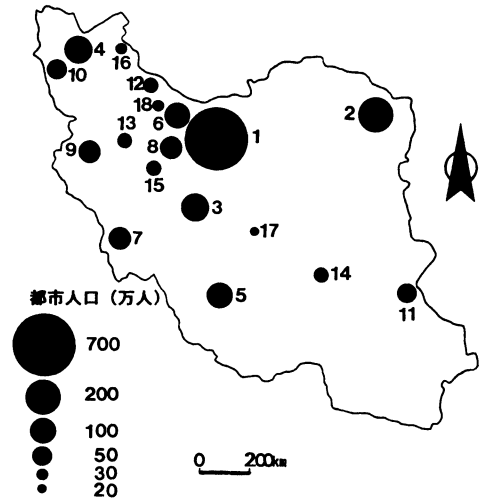


図5 イランの主要都市の分布（1996年）  
各都市の番号は、表3に示した1996年の人口順位（上位18位まで）を示す。

ムなどの宗教都市の中にも大きな人口を抱えた都市が存在する。

まず1976年の状況を見ると、首都テヘランの人口が突出しており、2位以下の都市との間には大きな格差が存在する。これは同都市がカジャール朝およびそれに続くパーレビ朝の首都であったことに加え、特に1973年の石油危機による原油収入の急増を背景として同国の経済が活況を呈し、建設業などを中心に地方から大量の労働力が流入していた<sup>19)</sup> ことなどが大きな要因であったと考えられる。

またテヘラン、イスファハン、シーラーズなど、マシュハドを除いた主要都市の大半は国土の中部から西部にかけて位置しており、逆に砂漠が大半を占め、気候条件の厳しい東南部にはめぼしい都市は見られない。しかし同じく気候条件は厳しいものの、イラクとの国境に近い西南部には同国がOPECにも加盟する有力な産油国であることを反映してアフワーズ、アバダン、ホッラムシャフルなどの都市が見られる。

次に図5を見ると、主要都市の人口は軒並み増

加したが、年平均増加率については図6にあるように明瞭な地域差が見られる。なお、この1970年代後半から1990年代後半にかけては、前述のようにイラン革命やイラン・イラク戦争などが勃発した同国の激動期に相当する。

まず同期間には、首都テヘランが、たしかに絶対数では200万人以上増加したものの、人口の年平均増加率は主要都市の中では最も低かったことが注目される。これはテヘランがイラン・イラク戦争時に空爆を受けることが多かったこと、また1979年に成立した革命政権が首都の機能分散や地方都市の育成を重視する政策<sup>20)</sup> を打ち出したことなどの影響が考えられる。

またテヘラン以外の都市でも1976年には上位18位に入っていたアバダン、ホッラムシャフルなどが1996年には脱落している。これは両市がイラクとの国境に近く、イラン・イラク戦争で大きな被害を受けた<sup>21)</sup> ためと考えられる。

一方、同時期に高い人口増加率を示した都市は大きく2つのタイプに区分することができる。第一のタイプはキャラジ、コム、アラークなどの都

表3 イランの主要都市の人口（単位：万人）

順位	1976	順位	1997
①	テヘラン 449.6	①	テヘラン 675.9
②	イスファハン 67.2	②	マシュハド 188.7
③	マシュハド 67.0	③	イスファハン 126.6
④	タブリーズ 59.9	④	タブリーズ 119.1
⑤	シーラーズ 41.6	⑤	シーラーズ 105.3
⑥	アフワーズ 32.9	⑥	キャラジ 94.1
⑦	アバダン 29.6	⑦	アフワーズ 80.5
⑧	ケルマンシャー 29.1	⑧	コム 77.8
⑨	コム 24.7	⑨	ケルマンシャー 69.3
⑩	ラシュト 18.7	⑩	ウルミエ 43.5
⑪	ウルミエ 16.4	⑪	ザーヘダーン 42.0
⑫	ハマダーン 15.6	⑫	ラシュト 41.8
⑬	アルダビール 14.7	⑬	ハマダーン 40.1
⑭	ホッラムシャフル 14.7	⑭	ケルマーン 38.5
⑮	ケルマーン 14.0	⑮	アラーク 38.1
⑯	キャラジ 13.9	⑯	アルダビール 34.0
⑰	ガズビーン 13.9	⑰	ヤズド 32.7
⑱	ヤズド 13.6	⑱	ガズビーン 29.1

国連人口年鑑による。

市であり、いずれもテヘランから比較的近距離にある。このうちキャラジはテヘランの衛星都市としての性格の強い都市であり、コムとアラークはイランで最も重要な鉄道幹線<sup>22)</sup>上に位置している。このことから、これらの3都市、特にキャラジとコムはテヘランの人口または中枢管理機能の一部を吸収する役割を果たしていると考えられる。

もう一つのタイプは、1996年にはイスファハンを抜いて国内第2位の都市になったマシュハドやウルミエ、ザーヘダーン<sup>23)</sup>などの都市であり、これらはすべて国境地帯に位置している。しかしこれらの都市のうちマシュハドとザーヘダーンは1979年の旧ソ連による軍事侵攻以降の国内情勢の混乱のためにイランを含めた周辺国に大量の難民が流出しているアフガニスタン、ウルミエはトルコ東部と同様に少数民族であるクルド人の多いイラク北部という具合に、いずれも政情が極めて不安定な地域に隣接していることから、これらの都市における人口の急増は難民の流入に象徴され

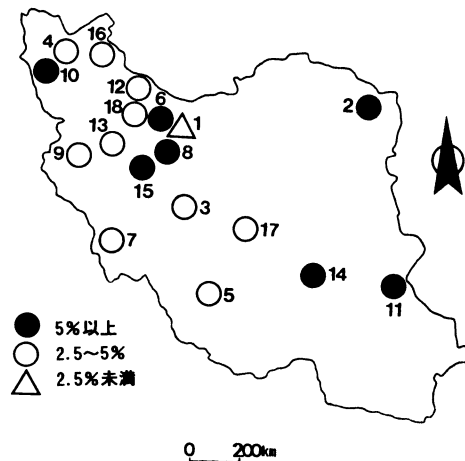


図6 イランの主要都市の年平均人口増加率（1976～1996年）

各都市の番号は、表3に示した1996年の人口順位（上位18位まで）を示す。

る、周辺国での政治的混乱による所が極めて大きいと考えられる。

以上のことから1970年代後半以降のイランの都市システムにおいては、革命政権による国土政策により、たしかに市域のみで考えた場合、首都テヘランへの人口集中はかなり抑制されたものの、その周辺の都市においてはかなり高い人口増加率が見られた。またイラン・イラク戦争による都市の破壊または消滅<sup>24)</sup>（アバダンなど）や周辺国における政情の混乱による難民の流入（ザーヘダーンなど）といった不安定要因が都市システムに与える影響が極めて強いことが明らかになった。

## V 結論

本研究においては、西アジア・北アフリカ諸国の都市システムが、1970年代後半から1990年代後半の間にいかなる変化を遂げたのか、トルコおよびイランを例に、主要都市の人口および年平均人口増加率を指標として検討を行った。

まずトルコの場合、検討対象期間に人口増加率

が大きかったのはイスタンブール、イズミル、ブルサ、アンタリヤなどの主に西部の海岸沿いにある大都市であり、特にイスタンブールは人口では首都アンカラを大きく引き離れた。これは同国において伝統的にドイツなどのヨーロッパ諸国に向かっていた移民が1973年の石油危機によるヨーロッパ経済の停滞を契機に、ヨーロッパからの帰国者を含めて国内の西海岸沿い的大都市へと流入するようになったこと、また国民の大半がイスラム教徒でありながら戒律のゆるやかな同国においては、アンタリヤの成長に象徴されるように、観光産業の発達などを通してこれまで以上にヨーロッパ諸国との経済的結びつきが強化されていることを反映したものと考えられる。

一方、イランにおいては1979年のイラン革命以前には首都テヘランと他都市との格差がトルコに比べてはるかに大きかったが、1990年代前半にはテヘランへの一極集中はより緩和されている。これは同市がイラン・イラク戦争時に大規模な攻撃を受けたことに加えて、イラン革命後に成立した共和国政府による地方分散化政策の影響も大きいと言えよう。しかしその一方でキャラジ、コムなどのテヘランに比較的近い都市の人口増加率はかなり高いことから、大都市圏レベルではテヘランの影響力はむしろ強化されていると考えられる。またイランでは検討対象期間にマシュハド、ザーヘダーン、ウルミエなどの国境付近の都市で人口増加率が大きかったが、これは周辺のアフガニスタンなどの政情の不安定な国々からの難民の流入による所が大きいと考えられる、しかしその一方で、ペルシャ湾岸のアバダンやホッラムシャフルのようにイラン・イラク戦争の激戦地となった都市の人口は激減している。このように同国の都市システムはトルコに比べて世界化の影響ははるかに小さく、逆に戦争などの不安定要因に左右される側面が非常に大きかったと言える。

以上に述べたように、トルコとイランは西アジア・北アフリカという同じイスラム圏に属し、また都市の歴史的背景にも類似点が多いものの、この数十年間の間に両国の都市システムは全く異なる方向へと展開してきたことが明らかになった。

今後は同地域に属する他の国々の都市システムも、トルコのように欧米諸国、特に地理的に近いヨーロッパ諸国との移民や観光産業を媒介とした強い結びつきを維持していくタイプと、イランのように都市システムが世界化の影響をほとんど受けることなく、主に地域政策などの国内的要因や周辺の国々からの難民の流入などによって左右されるタイプに大きく二分されていくものと予想される。前者に属する国としてはモロッコ<sup>25)</sup>、チュニジアなど、後者に属する国としてはシリアなどが挙げられよう。また世界最大の産油国であると同時にイスラム教の聖地であるメッカ、メディナを抱えるサウジアラビア、観光産業が発達している一方で、アラブ諸国最大の人口を抱え、文化的にも指導的役割を果たしているエジプトなどの都市システムはほぼ両者の中間的性格を有するものと考えられ、今後の動向が注目される。

最後に今後の課題としては、これらのサウジアラビア、エジプトなどの他の西アジア・北アフリカ諸国の都市システムについても分析を進めること、また今後予想される、欧米諸国の経済的影響力の強化に伴う世界化の進展により、イスタンブール、カイロ、アレクサンドリア、カサブランカなどの同地域にある主要都市の国際的地位がいかなる変貌を遂げるのかを検討を進めることなどが挙げられよう。

本稿の作成にあたり、多くの激励と助言をいただいた放送大学の高橋和夫先生に心から御礼申し上げます。わが国の西アジア・北アフリカ研究の第一人者である先生には筆者の学部時代から大学の授業や



ご著書を通して、多くのご指導をいただきました。特に近年、湾岸戦争や自衛隊のイラク派遣などをテーマとするテレビ番組へのご出演でお忙しいにも関わらず、気軽に質問にお答え下さったことに深く感謝します。またイスラムの文化について同じく学部時代から多くのことを教えて下さった東北学院大学の向後紀代美先生、大阪市立大学の水内俊雄先生、本研究の投稿を勧めて下さった愛知教育大学の阿部和俊先生、さらに学部および大学院時代を通しての筆者の指導教授である、東京大学の谷内達先生に心から御礼申し上げます。

#### 注

- 1) わが国においては、特に1990年代以降、都市システムの変遷過程や都市システムの国際比較が今後の都市システム研究の重要な課題であることが指摘されている。詳しくは森川 洋 (1990) : 『都市化と都市システム』大明堂, 阿部和俊 (2003) : 『20世紀の日本の都市地理学』古今書院などを参照。
- 2) 西アジアはユーラシア大陸, 北アフリカはアフリカ大陸に位置するが、両者は地理的に連続しており、また宗教ではイスラム教, 自然環境では乾燥気候が卓越しているなどの共通点が多いことから、本研究では「西アジア・北アフリカ」という地域呼称を用いることにする。
- 3) 1996年現在, 西アジア・北アフリカ諸国で最も人口の多いのはトルコであり、これにイラン, エジプトの順で続く (表1参照)。この3国の人口はいずれも6000万人前後であるが、4位以下の国々はすべて3000万人に満たない。
- 4) 西アジア・北アフリカ諸国における近年の地理学研究について展望したものには、例えば1960年代後半以降のイスラエルの事例を取り上げたWaterman, S. 1985. Not just milk and honey-now a way of life: Israeli human geography since the six-day war. *Progress in human Geography* 9-2, 194~234などがある。またフランスを代表する地理学雑誌であるBulletin de L'Association de Géographes Françaisの1985年第1号においては、マグレブ諸国が中心テーマとして取り上げられた。
- 5) 文献表にあるように、アジア経済研究所関連の研究が多いことも、このことを象徴すると言えよう。
- 6) 例えば内藤 (1988) は前述のようにシリアおよびその周辺国の国境の多くが大国主導で形成されたことを指摘している。たしかにこれは西アジア・北アフリカ諸国の多くの都市システムに共通すると言えよう。しかしこれは中南アフリカ, あるいは東ヨーロッパなどの他の地域とも共通している。都市システムの共通性という場合、単に政治的要因のみならず、経済的, 社会的, 文化的要因をも視野に入れる必要があろう。
- 7) 例えば同じアラブ人が多数を占める国でも、クウェートやアラブ首長国連邦のように一人当たりの国民総所得が15000ドルを越える国がある一方、イエメンのように500ドルに達しない国もある [数値はいずれも2000年。二宮書店 (2003) : 『データブック オブ ザ ワールド』による。]
- 8) 表1に掲げた各国における「都市」とは、イスラエル (人口の絶対数および職業構成比により定義) およびモロッコ (定義の情報を欠く) を除き、すべて「行政上の中心地としての都市」を意味する。
- 9) 本研究の検討対象時期に近い1980年から1988年にかけては、サウジアラビア, アラブ首長国連邦などのアラブの産油国においても主要都市の人口が軒並み急上昇したという指摘がある。詳しくは次の文献を参照。ブスタニ, R., ファルグ, P著, 牟田口義郎・水口 章監修 (1991) : 『情報アトラス アラブの世界』集英社。  
Boustani, R., Fargues, P. 1990. *Atlas du Monde Arabe Géopolitique et Société*. Paris: Bordas.
- 10) 国連人口年鑑に示されたトルコの都市人口の値は

- すべて推定値である。一方、イランの都市人口は国勢調査による実数値である。
- 11) トルコの東部はその大半が山岳地帯である上に、クルド人などの少数民族が多く、政治的にも経済的にも国内の中では後進地域である。
  - 12) ウルフアの人口増加率が高いのは、この都市が古来、シリアとを結ぶ重要な街道沿いに位置していることから、シリアとの国境貿易の進展の影響が大きいと考えられる。
  - 13) アンカラについてもいわゆる不良住宅であるゲジエコンドゥが密集した地区の拡大に象徴されるように人口増加率の大きかった時期が存在したものの、これはケレシュ・加納(1990)の指摘にあるように、本研究の考察対象よりも早い1950年代から1960年代にかけてである。
  - 14) たしかにイスタンブールでは1985年に市域の拡大が行なわれたが、検討対象とする両年度の間にも同市の人口が500万人以上も増加したことをこれだけで説明することには無理があろう。
  - 15) トルコからの海外出稼ぎ労働者は最盛期には年間10万人を上回り、その過半数が旧西ドイツに流入した。〔岩淵 孝(1993)：『地球を旅する地理の本 3 西アジア・アフリカ』大月書店〕。
  - 16) 西アジア・北アフリカ諸国で国際観光客の多い国としてはエジプト(512万人)、チュニジア(506万人)、トルコ(476万人)、モロッコ(411万人)などがある(数値はいずれも2000年。二宮書店：2003データブック オブ ザ ワールドによる)。これらの国々は原油の生産量があまり多くないことから経済に占める観光産業の重要性は相当高いと考えられる。
  - 17) 例えば他の多くのイスラム諸国とは異なって飲酒はかなり自由であり、ワインなどのアルコール飲料の生産も認められている。
  - 18) イスラム教のシーア派は現在、イランの国教に指定されており、1979年のイラン革命においても主導的役割を果たしたことで知られる。
  - 19) 当時の状況については高橋和夫(1995)：『燃え上がる海—湾岸現代史』東京大学出版会に詳しい。
  - 20) 前掲 加納(1995)。
  - 21) アバダンおよびホッラムシャフルがイラン・イラク戦争の激戦地になったことは高橋(1995)を参照。なおアバダンの人口は1996年には20.6万人まで回復しているが、1976年の29.6万人には及ばない。ホッラムシャフルも同様である。
  - 22) テヘランからコム、アラク、アフワズを経由してベルシャ湾沿岸に至る路線である。
  - 23) ザーヘダーンの1976年の人口は国連人口年鑑には記載されていないことから、10万人に達していなかったと考えられる。
  - 24) 同様の状況は、中東戦争の激戦地であったエジプトのスエズ運河周辺(前掲：佐藤, 1988)やシリアのイスラエルとの国境付近(前掲6)：内藤, 1985)などでも見られる。
  - 25) 経済的中枢管理機能の立地を通して見た場合、モロッコの都市システムにおいては、人口では国内最大であるが主に植民地時代の宗主国であるフランスによって開発が進められ、同国の主要都市の中ではかなり歴史の浅いカサブランカが、フェス、マラケシュなどの伝統的都市を押さえて圧倒的な優位を維持している(阿部, 2001)。このことに象徴されるように、同国はトルコと同様に地理的に近いヨーロッパ諸国、特に旧宗主国フランスとの結びつきが強く、ぶどう酒の生産も行われている。しかしその一方では、1991年の湾岸戦争を契機に、欧米諸国との親密な関係を改めることを要求する社会的運動も見られる。詳しくは米山俊直1996、『モロッコの迷宮都市フェス』平凡社を参照。

## 文献

- 阿部和俊 (1991) : 『日本の都市体系研究』 地人書房.
- 阿部和俊 (2001) : 『発展途上国の都市体系研究』 地人書房.
- 加納弘勝 (1980) : 『イラン社会を解剖する』 東京新聞出版局.
- 加納弘勝 (1995) : 中東・北アフリカとイランの都市化. 小島麗逸・幡谷則子編『発展途上国の都市化と貧困層』 アジア経済研究所, 155~187.
- 北田晃司 (1997) : 1960年代以降の韓国の主要都市における中枢管理機能の立地とその推移. 地理科学 52-3, 177~194.
- 北田晃司 (2000) : 主要都市の人口およびその増加率からみたイタリア・スペインの都市システム. 地理学報告91, 1~11.
- ケレシユ・加納弘勝 (1990) : 『トルコの都市と社会意識』 アジア経済研究所.
- 佐藤克彦 (1988) : エジプトの都市化と人口移動.
- 河辺 宏編『発展途上国の都市システム』 アジア経済研究所, 117~146.
- 鈴木 均 (1997) : イランの生態圏と地域的構成.
- 後藤 晃・鈴木 均編『中東における中央権力と地域性』 アジア経済研究所, 18~58.
- 寺坂昭信編 (1994) : 『イスラム都市の変容—アンカラの都市発達と地域構造』 古今書院.
- 内藤正典 (1985) : シリアの都市システム. 山口岳志編『世界の都市システム』 古今書院, 225~263.
- 内藤正典 (1988) : シリアにおける都市システム研究のパーспекティブ. 河辺 宏編『発展途上国の都市システム』 アジア経済研究所, 51~81.
- 水内俊雄 (1996) : 国際観光リズム下におけるトルコ・アンタリヤ市の都市発展と都市政策. 大阪市立大学文学部紀要, 48-3 : 35~65.
- Berg, L., and Meer, J. (1988): Dynamics of urban systems: general trends and Dutch experiences. *Environment and Planning A* 20, 1471-1486.

## Changing Urban System in Turkey and Iran -Through the population and its change of main cities-

Koji KITADA (Parttime lecturer, Chukyo University)

In analyzing the national urban system, it is not sufficient to put spotlight only on the urban system in consideration itself. We also have to consider the position of its urban system in wider scale of space including the country, such as Europe and East Asia. One of the most effective way is to compare the urban system with that of countries in neighborhood where there is so much resemblance in history and culture. And it is desirable to make a model about changing process of these urban systems, especially paying attention to the influence of important factors in global scale.

In this article, we investigate the recent changing process of urban systems of countries in West Asia and North Africa, representing by Turkey and Iran. Both of them have the largest population in this area, and have much resemblance in historical, cultural factors with another countries in this area. But there is so much contrast in the relation with western countries especially after the Islamic revolution of Iran in 1979. We analyze through the population of main cities cited in the U. N. population census.

In Turkey, larger cities are originally concentrated on western coastal area like Istanbul, Bursa and Izmir. This inclination was more strengthened by the 1990s, and Istanbul firmed its position as a primate city. The first reason of this change is that many immigrants from inner area and also returnees from Europe moved to these cities. Another reason is the development of sightseeing industry in the coastal cities like Antalya. This change shows that Turkey continue to keep strong economic link with European countries, and its urban system has been much influenced by globalization, in spite of the existence of muslims in majority.

In contrast, the urban system of Iran saw much different change in almost the same period. Tehran, although the largest city and capital, saw only little increase in population, because of the attack during the Iran-Iraq War and the policy of decentralization by the government after the Islamic revolution. On the contrary, population of cities around Tehran grew so much like Qom and Karaj. And population of cities near the frontier also saw much increase like Mashhad and Zahedan, because of the increase of refugees from neighborhood countries like Afghanistan.

As is shown above, the urban system of Turkey has been under strong influence of globalization. But the urban system of Iran had received almost no influence of globalization, and had been much influenced by the factor like local policy of the government and war including Iran-Iraq war and civil war in neighborhood countries.

Judging from these, we can say that the national urban systems of countries in West Asia and North Africa will mainly be divided into two types. One is the urban systems of countries which will continue to receive much influence from globalization such as Turkey and Morocco. Another is the urban systems of those which will have much difficulty to be influenced by globalization like Iran and Syria.

key words: Urban system, West Asia and North Africa, Turkey, Iran, globalization, Islamic revolution